

正倉院の新発見上代錦（後篇）

松 本 包 夫

前篇に続いて第二項動物唐花文系以下の各説を記し、つぎに綜合所見を述べる。なお各説の末尾に、前篇発表後にあらたに発見した花文系錦二種（追補1、2）を加えた。また最後に全資料の所在一覧表を付した。ちなみに凡例はすべて前篇に準じる。

各 説

二 動物唐花文系（新23、24）

新23 白地鴛鴦唐花文錦（モノクロ図版No.1）

〔資料〕 用途不明裂片一片。

〔所見〕 資料の裂は巾二〇・五糎、現長二三糎。複雑三枚綾組織の緯錦。主文は八稜形の蓮唐花文のなかに、二茎一花の小側花を左右から銜え合

う二羽の鴛鴦をあらわしたものである。その下半分は裁ち落され、またその周囲も擦損のため不明な点が少なくないが、各稜端に開蓮花を、中間に捲蔓と葉文を配しているようである。副文もはっきりしないが、主文の周囲と相い通じる感覚の花葉による菱形構成の花文らしい。配彩は、地が白。主文の内外を劃する八稜形の蔓は緑、中央空地は紫、外周の捲蔓・葉文は緑・深緑・紫、同じく外周の稜端の開蓮花と中央の鴛鴦は緑・橙黄・白・紫で、計五色を使っている。なお副文は右記のうち橙黄を除く四色が認められる。経はすべて淡黄色。主文の径はおよそ一二、三糎前後と思われる。現在知られている上代の動物唐花文錦のなかではいちばん規模が小さく、周囲の花、なかの鴛鴦も、それにふさわしく繊細にあらわされている。糸込みは一種間に、表に出る緯約四八越、母経約二〇本。ちなみに後掲新27白茶地唐草襷花文錦は、本裂の上に重なってい



No. 103 鹿唐花文錦

る。

新24 赤地麒麟唐花文

錦

(カラー図版No.1)

〔資料〕 幡頭裂一件、幡身の上縁裂一件、幡身の長側縁裂一件。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。資料中の幡頭裂に主文の上半分が、他の二件に主文の片側部と副

分の配彩はカラー図版にあらわれているので詳述しないが、色数は、赤・淡黄・肌色・白・深縹・浅緑・紫・黒紫の計八色を数え、多彩なことでは上代錦中第一級に属する。主文の周囲の花文の表現はやや硬く、かつ量細配彩をあまり使用していないので、No.77Aに較べるとふくよかさ が薄れてきているが、現在知られている動物唐花文錦 (No.100・101・102・103 (挿図)・新23、および東京国立博物館蔵赤地獣唐花文錦)のうちでは、最も唐花文らしさを備えている。色数の多いこと、文径の大きさともあわせて、上代動物唐花文錦中、いちばんの雄作である。本件の資料はすべて聖武天皇一周忌齋会用の道場幡であり、本件と文様上類似点をもつ No.77A・99もまた同じ齋会の幡に使用されているから、本件およびこれら一連の錦は、おそらくこの齋会を溯ること遠くないところに、ほぼ時を同じくして製作されたものであろう。経はすべて淡紫で、糸込みは一穂間に、表に出る緯約二四越、母経約一四本である。

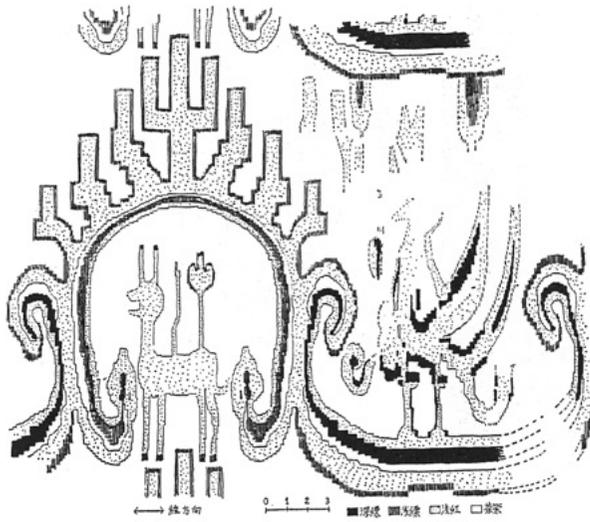
三 唐草文系 (新25~29)

新25 紫地唐草鳥獸文錦 (カラー図版No.3・4)

〔資料〕 浅形襖二両また一隻、帯(勤肚巾)一条。

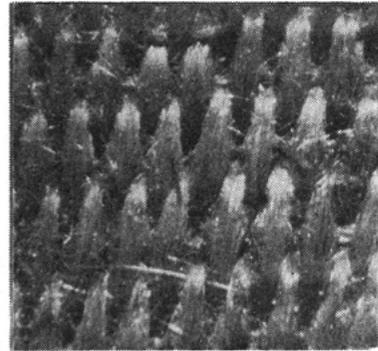
〔所見〕 資料の浅形襖二両中一両の片方の内面に「東大寺後一鼓撃機天平勝寶四年四月九日」と大仏開眼会に使用されたことを示す墨書がある。複様平組織の経錦(挿図1)で緯はすべて茶紫色。文様は、各資料とも一單位が完全にあらわれているものがなく、また細部に不明の部分もあるが、

文の先端が僅かにあらわれている。資料三件を総合しても、主文の下半分と副文の大部分はわからないが、カラー図版にみるとおり雄大華麗な動物唐花文である。主文の中央には長い立耳をもつ独角のけもの(おそらく麒麟であろう)二頭が向きあい、一つの輪環花葉を左右から啖いあう。この輪環花葉はNo.99の鴛鴦が啖いあっているものと類似している。主文の周囲にはやや扁平な団扇形花文がめぐらされているが、各花文を劃する蔓に結節を作る点、および花文の向うにべつな花文の先端を覗かせる複弁形式は、No.77Aと同じ手法である。副文は花文の先端が僅かにあらわれているにすぎないが、やはり通常の唐花文の副文に類する菱形花文であろう。主文の径は約三三・五種とかなり大きい。つぎに主要部



新25 文様復元図(挿図2)

の内外には内捲きと外捲きの蕨手形が、また上部には幾何学的な硬い山字形を頂点とし、その両側にこれを略式化した突起がならぶ。配彩は全般的に暗くて、地色は濃い茶紫、唐草の穹窿部は浅紅に浅縹の縁取り、その下の四足獣は



新25 組織拡大図(挿図1)

概略の構成は挿図2の復元図のとおりで、左右方向に波行する唐草を基調とし、その穹窿部の下のドーム内には、省略化した立樹様のものを背後に負う鹿風の四足獣を、また唐草の波行線の鞍部上には鳥を、それぞれ左向きにあらわしている。そして唐草のドームの中間



倭蘭出土漢代錦(原田淑人「増補漢、六朝の服飾」より)(挿図3)

平組織の経錦は、本件と後掲新31紫地亀甲花文錦の二種類、ともに新発見のものだが、文様の的には本件の方が、より如実に古様を示している。八世紀中葉、使用年代を明確に抑えられる錦のなかで

浅紅、唐草の鞍部は浅紅・浅縹・深縹、その上の鳥は浅紅と深縹であらわされる。すなわち地色とともに三重経の部分(巾約一一・五種)と四重経の部分(巾約一三・五種)とが交替にならぶわけで、右両者をあわせた巾約二五種が文巾となる。それに対し文丈は約一九・七種である。このような波行唐草に鳥獣を組み合わせた文様は、漢・六朝期の経錦にしばしばみるところであり(たとえば挿図3)、文丈に比して文巾が長い点や、暗い色調もまた同じころの錦の一般的傾向と軌を一にしている。大仏開眼会時の銘をもつ経錦のうち、とくに文様が古風なものとしては、No.5 獅鬚文長斑錦とNo.115 花唐草文長斑錦(挿図4、5)がすでに知られているが、それらはすべて複雑綾組織である。一方、同法会に使用された複雑



No. 5 獅嚙文長斑錦(挿図4)

は、おそらく本件が組織・文

様の両面からして、最も古風といえるのではないだろうか。

ちなみに、本件の唐草の頂部の山字形は、綾No.99(挿図6)

に類似のものをみる以外に例がない。その解説(書陵部紀

要一二号、西村兵部「正倉院の綾」には、これを燭台様の

器物と解されているが、

同綾文の山字形の両脇に

みえる小突起形や、同下

部の内捲蕨手形が、いず

れも本件の唐草と相い通

じる感覚をもっているこ

とからして、この綾の山

字形文も、やはり本件の

ような唐草のいちぢるしく抽象化された姿と考えるのが妥当ではないだ

ろうか。糸込みは一種間に、表に出る経約二八本、母緯約一二越。

新26 赤・白交地唐草襷花文錦 (カラー図版No.11)

〔資料〕 衣服の袖残片一片、用途不明裂小残片八片。



No. 115 花唐草文長斑錦(挿図5)



No. 99 香炉形文綾(挿図6)

〔所見〕 複雑三枚綾組織

の緯錦。経はすべて黄茶色。文様は、辻に小四弁

花、中間に小側花と小葉文をつける唐草で、全面

を緩いカーブの襷状に区劃し、襷内にほぼ同形の

大小二種の四弁花文をお

さめたものである。用彩は、白、赤、縹、茶紫の四色だが、とくに注意

をひくのは襷内の空地の地色を赤と白に分けていることである。またそ

れに応じて襷内の四弁花文も、赤地中のもは白縁、白地中のもは赤

縁と、違えている。次掲の新27と同系統の文様だが、本件の方が唐草の

線に力強さが認められる。糸込みは一種間に、表に出る緯約二九越、母

経約一五本。なお、資料の用途不明裂小残片八片中の六片は、地部は全

部黄色、襷と襷内の花の縁は焦茶、その花弁は深縹であらわされている。

新27 白茶地唐草襷花文錦 (モノクロ図版No.2)

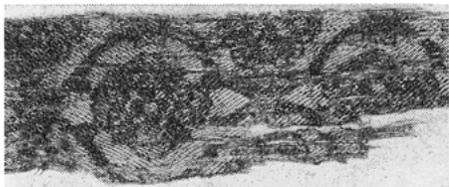
〔資料〕 用途不明裁文裂残片一片。

〔所見〕 資料の裂は丈一四・四種、巾二〇・七種の三葉形裁文で、先掲

新23の裂の上にとじつけられているものだが、現在とじ糸は失なわれ、

両者分離している。複雑三枚綾組織の緯錦で、経はすべて椴色。文様は、

白茶色の地に、赤で縁取りした紺の蔓風唐草を網目状襷にくりひろげ、



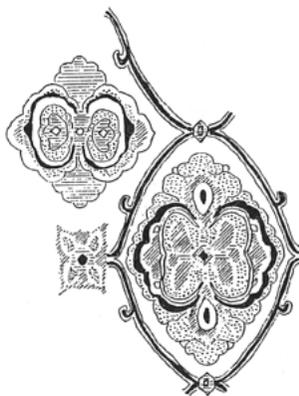
No. 93 唐草花文錦(挿図2)

文様の雰囲気は本件がいちばんやさしく、様式的には右諸件のうちで最も後期に位置するようである。糸込みは一種間に、表に出る緯約三二越、母経約二〇本。

新28 白地集花葉文錦 (カラー図版No.2)

〔資料〕 褥の表裂一点。

〔所見〕 長方形の褥の表裂だが、外面にあらわれる部分は破損がはなはだしく、片長側の縁裂(後掲新36双鳥花文長斑錦)の下に、比較的保存のよい部分が細長く残っているにすぎない。複様三枚



ノ紺 ノ赤 茶 緑 白茶 不明部

緯方向 0 1 2 3
新27 文様復元図(挿図1)

幅だが力強さに乏しく、褥内の花文もかなり便化が進んでいる(挿図1)。No.93、94、および前件の新26などと同系統の文様で、とくにNo.93(挿図2)に近いが、

綾組織の経錦で、地は白、文様は緑と紅褐色の三重経。緯はすべて紅褐色である。文様は、七顆の小四弁花によって構成される径約三・五厘の集花文が主体で、副文にあたるものはみえず、空間は花葉をもつ蔓草で埋めている。資料の現存部の巾が約三厘と狭いので、集花文の配列は千鳥式か併列式かはわからない。文様系統としては新26、27等に属するが、本件の場合、蔓草は葉が強調されて蔓や茎が目立たず、そのうえ空間を殆ど埋めつくすようにびっしりと配されているので、一見蔓草の地文の上に集花が^{うも}上^{もん}文として重なっているような印象をうける。このような様相、および主体の文様が単独の花でなく小花の集合体となっていること、さらには花葉のやわらかな表現などをあわせて、経錦ではあるが、いちぢるしく和風の傾向が強いといえよう。図版の右端は織耳で、経が偏^こみ、文様が左右に圧縮されている。糸込みは織耳部以外で、一種間に表に出る経約二〇本、母緯約一六越である。

新29 黄地唐草花文錦 (カラー図版No.8)

〔資料〕 用途不明裂小残片二片。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。経はすべて淡紫。文様は、径約六・三厘と小形ながら、かなり複雑な複弁八花形を中心とし、その周囲を唐草の蔓で八稜棹形に囲む。唐草は各稜部からさらに外へ向って伸びて大小の紡錘形に交差し、その間に闊葉の三葉形の介在するのがみえる。このような唐草の構成は一見してNo.116の葡萄唐草文錦をほうふつとさせるし、また三葉形も綾のNo.82、同84のいずれも葡萄唐草の葉文に近似性が認め

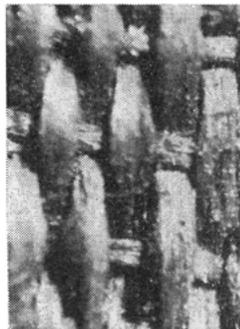
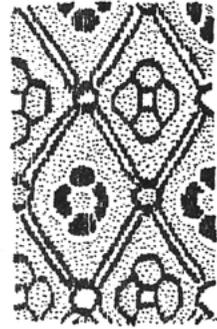
られるが、本件は三葉形の先端が翻転して、蔓の紡錘形部に捲きつくという、きわめて特異な形式をとっている点が注目に値いする。資料が小片(大きい方でも約七厘四方にすぎない)であるため全貌がわからないが、おそらく葡萄唐草文系に属する珍しい新発見種と思われるので、ここに採り上げた。用彩は図版にみるとおり、浅緑・縹・黄・白・赤・茶紫の六重緯である。糸込みは一縦間に、表に出る緯約三四越、母経約二〇本。

四 幾何学文系 (新30~33)

新30 緑地襷小花文錦 (モノクロ図版No.3)

〔資料〕 浅形襷一隻。

〔所見〕 複雑平組織の経錦。退色がはなはだしくて文様は非常に見にくく、図版にも殆ど写っていないが、実物について精査すると、挿図に示したような概略の様相が浮かび上がってくる。すなわち、辻に小珠をもつ直線の襷構成の空間に四弁小花をおさめた構図である。地色は緑、襷と小珠はともに黄に紫の縁取り、四弁小花は、黄の縁取りに花卉を紫で花芯を緑であらわしたものと、紫の縁取りに花卉を緑で花芯を黄であらわしたものが、千鳥に配されている。三重経で、緯はすべて紫。組織、文様、色数の少ないことなどよりして、きわめて古風な作品である。ちなみに本件の襷は、内部に「東寺綱印」らしい朱方印が捺されているが、使用時期は不明である。糸込みは一縦間に、表に出る経約三〇本、母緯



新31 組織拡大図



約一六越。
新31 紫地亀甲花文錦
(カラー図版)
No.10
〔資料〕 半臂一点

(枉縁と裾縁に本件の錦をつける)、深形襷四隻(各口縁に本件の錦をめぐらす)、浅形襷一隻。

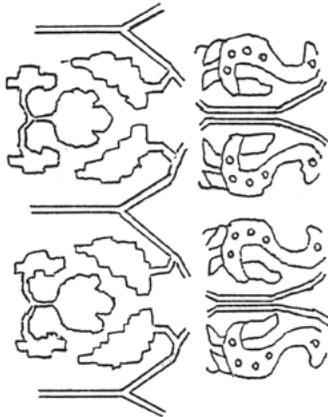
〔所見〕 複雑平組織の経錦(挿図)。

文様は、辻に小花風結節をもつ亀甲形の枠内に放射状十二弁の星形花文をおさめたものである。星形花文はNo.16目交襷花文錦のものに似ているが、十二弁の間隔、太さ、長さなどは不揃いで、弁の先が亀甲枠に接するものもあり、概して粗放、未整備の感が深く、組織ともあわせて古風な趣きをたたえた錦である。配彩は紫地に、亀甲枠は赤・黄二色のものと赤・緑二色のものとに分け、辻の小結節は緑・黄、星形花文は花芯はすべて白で、花卉は緑に赤縁のものに黄に赤縁のものとの二種とする。すなわち、紫・黄・赤・白、紫・黄・赤・緑、紫・赤・白・緑、と三種の四重経で構成されるわけである。緯はすべて紫。ちなみに資料中の深形襷の一隻は、表に「東大寺唐散楽」天平勝寶四年四月九日と墨書があ

り、大仏開眼会用であったことが知られる。複雑平組織の経錦で大仏開眼会の記銘をもつものは、本件と先掲新25の二種類があるのみである。糸込みは一趣間に、表に出る経約三六本、母緯約一四越。

新32 赤紫地亀甲花鳥文錦 (モノクロ図版No.4)

〔資料〕 幡残片一点。



新32 文様復元図
経方向

〔所見〕 複雑平組織の経錦。直線的な亀甲形の枠内に双鳥と花葉を縦一列交替に配した図様で、文様はすべて経方向に対して横向きにあらわされている。資料は破損がひどくて、双鳥をおさめる亀甲枠と花葉を内蔵する亀甲枠とのつながりがやや明瞭を欠いている(復元図参照)。用彩は三重経で、地は赤紫。双鳥の身体は浅緑に黄の縁取りで、鳥の眼と斑文は赤紫。双鳥の左右(織り方向としては上下)の枠は黄。その他はすべて浅緑に黄の縁取りである。緯はすべて淡黄色。糸込みは一趣間に、表に出る経約三二本、母緯約一二越である。本件の錦は幡の頭部の縁と舌に使われているものが、この幡は形式上、法隆寺系に属している(本誌八号、年次報告「染織品の整理と修理」の項参照)。平組織の経錦という技法ともあわせて、

製作年代は八世紀初頭を下らないものと考えられる。

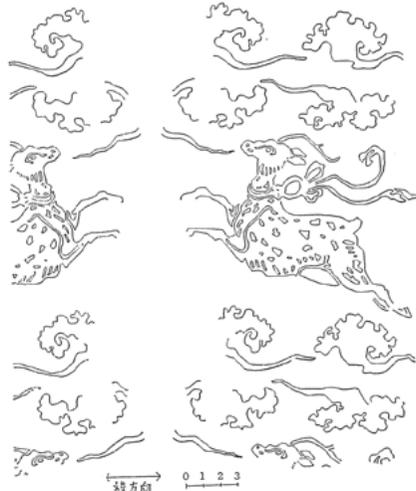
新33 段地襷菱文錦 (モノクロ図版No.14)

〔資料〕 用途不明裂残片一片。

〔所見〕 資料の裂片は縦約六種、巾約五・二種の長方形。複雑三枚綾組織の緯錦である。文様は、やや横長の襷菱内に菱文をおさめた構図で、襷の辻には便化された小花がおかれている。襷と小花は黄で白と緑の縁取り。菱は、淡肌色と赤の二重菱(A)と、黄・紺・緑の三重菱(B)との二種類がある。地色は一見すると黄一色のようにだが、じつは上下巾約二・六種の淡肌色の段(イ)と黄の段(ロ)とに分かれている。そしてイの段中にはAの菱が、ロの段中にはBの菱がおかれているが、イとロの段の境い目に位置する菱は上下半分ずつ色変りになっている。イの段は、淡肌色・赤・白・黄・緑の五重緯、ロの段は、白・黄・緑の四重緯である。なお図版の下辺にあらわれている菱は、上半分がBの配色で下半分は紫色に変えられていて、本来この下方にイ・ロ以外のべつの色の段が存在していたことと想像される。経はすべて淡い茶色で殆ど撚りがなく、太さは緯の四分の一から五分の一程度。緯は僅かにZ撚りである。糸込みは一趣間に、表に出る緯約三〇越、母経約二〇本。本件の錦は、資料が用途不明のものただ一片しかないこと、文様の雰囲気が中世的であること、段地の薄い錦であることなどから、年代が下るのではないかと感もあるが、陰経を有し、裂裏は経三枚綾組織で、八世紀の通常の緯錦と変るところがないので、ここに採り上げることとした。

五 その他の系統 (新34~36)

新34 浅緑地鹿雲文錦 (モノクロ図版No.5~8)



新34 文様復元図

〔資料〕 幡脚垂
端飾二五枚
〔所見〕 複様三
枚綾組織の緯錦。
二色の錦で、各
資料通じて現在
おおむね地は茶
色、文様は淡茶
色を呈している
が、そのうち一

枚は、僅かに浅緑地に淡褐色文様のもとの色らしい部分がある。文様は各資料をあわせて作成した復元図にみるとおり、一段ごとに上下の方向を変えた雲の横列中に、巾約一三種の鹿をシンメトリックに対向させた構図である。資料中の一枚(モノクロ図版No.7)に、擦損が多いが鹿の向きあう部分が認められ、これを堺に文様は左右対称に折返されている。文様全体の上下の繰返しと鹿の後方はどの資料によってもわからないが、現在判明している部分の巾は約三〇種だから、この錦がもし通常織巾(約五七種)であるとすれば、鹿の後方の不明部の巾は左右各約一三・五種となる。文様の様子から察して、ここにもやはり雲が一つく

らいあらわされていたのだろう。この錦の雲は雲頭(くもかしら)に渦文が多く、宝庫の宝物黒柿蘇芳染金銀山水絵箱、麻布菩薩図の雲と共通の莊重感をもち、鹿も頸に綬を結び写実味ゆたかな躍動的なすがたであらわされる。瑞祥的雰囲気のためよう絵画風文様である。資料はすべて聖武天皇一周忌齋会用の道場幡のものである。経はすべて淡茶色。糸込みは一纏間に、表面に出る緯約二二越、母経約一八本。

(備考) 東京国立博物館にも本件と同文様の道場幡垂端飾が一枚所蔵され、それには鹿の後半身部があらわれている(「ミュージアム」昭和59年6月号、長崎巖「東京国立博物館保管上代錦の文様」図48)。

新35 赤地花唐草狩猟文錦 (カラー図版No.7)

〔資料〕 天蓋垂飾一枚、同小残片一片、用途不明裂小残片二片。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。文様は図版および復元図にみるとおり、径約一三種の淡茶地円圏内に、白駱駝に騎し、前後から駱駝によしのぼって襲いかかろうとする緑色のけものと斑文のある走獣に対して、槍をふるって応戦する胡服の人物をあらわし、その外側、花唐草で囲まれた内径約二六・五種の浅緑地中には、前肢を高く挙げて躍動する馬に騎する人物、バルチアン・シヨットの騎馬人物、走鹿、山岳などをめぐらしている。メイン・テーマである中央円圏内の人獣斗争文は宝庫の宝物紫檀木画棊局の盤縁の象牙嵌文様に類似のデザインがある。外周の浅緑地圏内の諸文様は山野遊猟の情景と思われるが、その布置法は絵画風で、No.41、42や、法隆寺蔵獅子狩文錦などの通常の狩猟文錦の図様とは、い

ちぢるしく感覚を異にする。またNo.41や42のような日本製や、はるか西方の東ヨーロッパなどのメダリオン系狩猟文錦には、矮小化・形式化しつつもお形骸をとどめている聖樹が、本件では全く払拭され、最外周の唐草もNo.41などの葡萄唐草に対して、ここでは東洋的な花唐草に転化している。以上のような点を考慮しながら推測すれば、本件は当時わが国に流布していた狩猟・動物斗争などのデザインを適宜に採用布置して創造した国産ではなかったであろうか。資料の一つ、天蓋垂飾の裏に貼られている綾の文様が花枝唐草文(綾No.89・90の類)で、八世紀中葉の大仏開眼会・聖武天皇一周忌齋会の諸用品に頻用されているものであることは、本件の製作年代を間接的に示唆しているといひ得よう。ともかく他



新35 文様復元図

に例をみない珍奇な文様であるが、資料は冒頭に挙げたとおり、わずかに四点にすぎない。文様の珍奇さゆえに、ごく一部の人の好みにとどまり、おおかたの共感を得ることなく、量産に至らなかったであろう。用彩は、赤・緑・浅緑・淡茶・白・黒紫の六色。通常巾ならば一稔の錦であろう。糸込みは一穂間に、表に出る緯約三四越、母経約二二本。

新36 双鳥花文長斑錦 (カラー図版No.9)

〔資料〕 幡身の長側縁裂一件、褥の縁裂一件。

〔所見〕 復様三枚綾組織の経錦。地部は、巾約五穂の縹と茶紫の縦縞を交互に繰り返す。文様は、花葉を銜えて花座上で向きあう左右対称形の双鳥が横向きにあらわれ、その間の左右端(文様主体にみれば上下端)に小草花が配されている。用彩は、縹地の部分では、縹・紺の二重経、縹・白・肌色など数種の三重経、および縹・紺・黄・橙黄の四重経とで構成されている。茶紫地の部分では、前者の紺が浅緑に入れ替る以外、文様も色数も変らないが、図版にみるとおり地の茶紫の経は殆ど脱落している。緯はすべて縹で経よりやや細く、経・緯ともにS撚りである。糸込みは一穂間に、表に出る経約三四本、母緯約二九越。縞地に双鳥をあらわす錦としては、No.140~142がすでに知られているが、それらがすべて緯錦で、文様・用彩ともに多様であるのに対し、本件は経錦で、地色も二色に限られ、またNo.140、141の双鳥のように首に綬をつけることもなく、その他の付加文様も少ないなど、全体に簡明である。なお資料中の前者は聖武天皇一周忌齋会用の錦道場幡、後者は既掲新28の褥の縁裂で

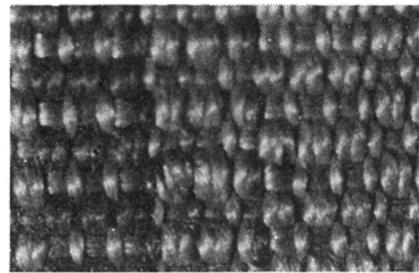
ある。

六 特殊組織 (新37~40)

新37 淡黄地経緋文平織物 (カラー図版No.13)

〔資料〕 幡頭風三角形裂一枚。

〔所見〕 資料の裂は、縦二〇・五種、底辺巾三七種の三角形で、幡頭の残片かと思われる。経はすべてゆるいS撚で、羽二重風に二本引揃えのもの(A——一本の太さ約〇・二耗)と、一本だけのもの(B——太さ約〇・一五耗)とが原則的に交互に配されているが、随所にA・A、またはB・Bと、同じ種類が併列する部分が存在する。但し併列部のあらわれは不規則で、一定の繰返し順序は認められない。経の染色はABともに淡黄一色のものが主体であるが、随所にその淡黄の一部を紫または淡茶に染めたものをまじえ、不規則な経緋の縞文様に整経している。つぎに緯は、太さ約〇・三耗の無撚の平糸で、淡黄色のものが主体だが、随所にこれも不規則に淡茶糸と淡緑糸とをそれぞれ幾越か通している。そして前記の経A・Bと、右の緯とで全体を平組織に織り上げているのだが、このうちAは引揃えの二本をB同様一本と見なして織られており、かつ糸込みが一纏間に経はA二二組(すなわち四四本)とB二二本前後で計約六六本、緯は約二二越と、綴織とは反対にはなだしく経込が密であるため、とくに太いAが左右の込みによって表面に粒状に押し上げられ横畝状を呈している。しかもその畝は既述のようにA・A、また



新37 組織拡大図

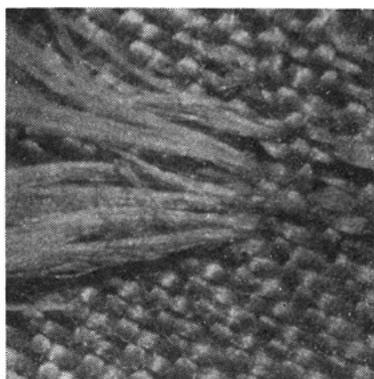
はB・Bと同種の経が併列する箇所にくると、しぜん線が切れて上下の越に段違いに移行し、風変りな帛面感を呈している(挿図)。資料はただ一点しかないが、技法的には素朴なものであり、かつNo.23~25などのいわゆる太子間道の系統に属するところから、上代裂と考えて差支えあるまい。

新38 淡茶地花文錦

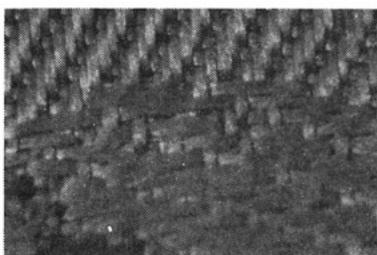
(モノクロ図版No.11)

〔資料〕 幡身の下縁裂一件。

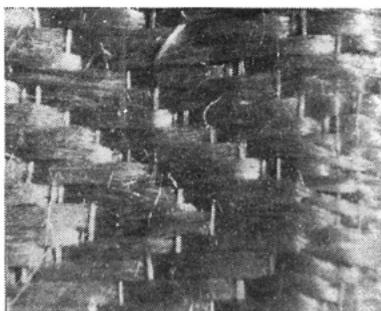
〔所見〕 経綾地絵緯浮文の錦である。経は淡茶色でS撚り。地緯は同色で撚りが無い。どちらも太さはほぼ同じで、地部はこの経と地緯で右上の経四枚綾組織としている。また絵緯は、白、紫、浅緑、浅紅の四色で、いずれも地緯よりやや太い平糸である。文様は、主文にあたる径約三・四種の花文を約一〇種間隔で横にならべ、その間の広い空地には、径約〇・九種の菱形小花を散らしている。主文は中心が浅緑で花卉は内が紫で外は白、菱形小花は、紫芯白弁のものと、浅緑芯白弁浅紅縁のものが、横一列交替に配されている(挿図1)。裂が横帯状であるため、主文の上下の繰返しは不明。絵緯はすべて裂裏では巾全体にわたって長く浮糸となって遊び(挿図2)、表も浮文で頭文されているが、浮糸の弱



新38 裂裏組織拡大図(挿図2)



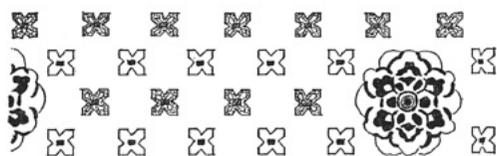
新38 裂表組織拡大図(挿図3)



新39 地部組織拡大図(挿図1)



新39 地部・浮文部(右)組織拡大図(挿図2)



緯糸向 0 1 2 3 □白 ■紫 □浅紅 ■緑

新38 文様復元図(挿図1)

さをカバーするためか、主文の花弁部など渡りの長い部分では文全体に浮かず、経数本から一〇余本おきに地揃でおさえられている(挿図3)。No.107花鳥浮文錦とNo.109花樹鳥獸文錦との中間的技法で、正倉院裂中に類例をみない。糸込みは、一糎間に経約五八本、地緯約四〇越である。なお本件の幡は使用時期はわからないが、幡身部がNo.105唐花獅子文錦と右記のNo.107との継分けとなっている。この二種の錦はともに聖武天皇一周忌齋会の道場幡に頻用されているので、本件の幡も一応それと同じころの使用品と考えられる。ただしNo.107の錦は通常は経綾地緯浮文であらわされるものだが、

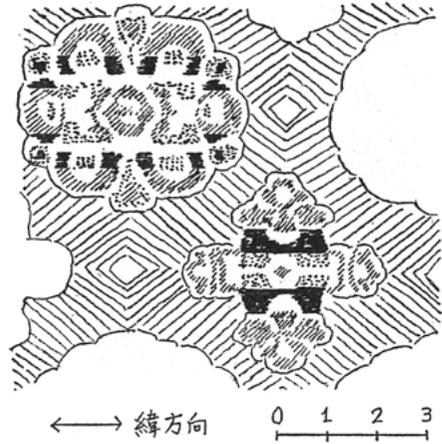
本件幡身のNo.107は三枚綾組織緯錦となっていて、これもまた他に例をみない貴重な資料である。

(備考)この幡は本誌3号所収、松本包夫「正倉院の染織幡」(前篇)の15にあたる。

新39 緑地花文錦 (モノクロ図版No.12・13)

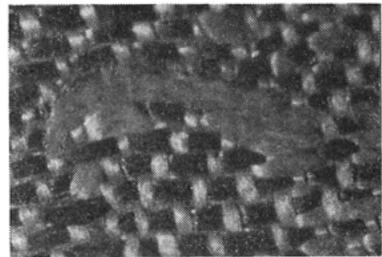
〔資料〕幡一旒の身上緑および長側縁。

〔所見〕経は母・陰経ともに淡茶色で僅かにS撚りの、巾〇・〇五耗ていどのごく細い糸。緯は、緑、白、赤、紫の四種で、すべて巾〇・七耗前後の平糸。緑と白の緯は全越にわたって、それに赤緯と紫緯が交互に段状に織り加えられている(赤緯は約二〇越で巾約一糎、紫緯は約一七越で巾約〇・七糎)。すなわち通じて三重緯である。地部は緑緯の

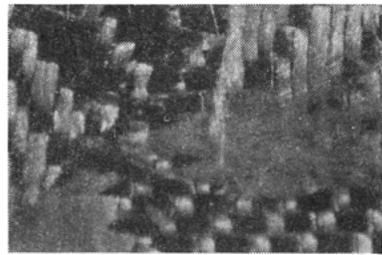


■紫 □白 ■緑 ■赤
新39 文様復元図(挿図3)

四枚綾組織で入子菱文をあらわし(挿図1)、文様は右記の四色の緯で、径約四・六糎の木瓜形花文と菱形花文を浮文で織り出している(挿図2・3)。したがって、地と文様の両方にかかわる緑緯以



新40 裂裏組織拡大図(挿図1)



新40 裂裏絵緯端切放し部拡大図(挿図2)

外の三色の緯は、地部ではすべて裂裏に沈み、経の四枚綾組織でおさえられている。帛面の様相は入子菱の地に花文が乗っているようで、後世の二倍織物をほうふつとさせる特殊な作品である。しかし本体の幡が、幡頭に八世紀通例の三枚綾組織緯錦の唐花文錦を用い、幡身にも、大仏開眼会や聖武天皇一周忌齋会用の染織品に頻用されているNo.89花枝唐草文綾やNo.92花唐草鳥文綾をあてているところからみて、本件もやはり八世紀の製作と考えてさしつかえあるまい。糸込みは一糎間に、表に出る緯約二二越、母経約一六本。

(備考)この幡は、前項の備考に挙げた論文中の20にあたる。

新40 白茶地花葉鹿文錦 (カラー図版No.5・6)

〔資料〕用途不明裂小残片七片。

〔所見〕資料は最大のもの(カラー図版6)でも現長四・五糎に現巾三・

九糎という小片ばかりで、どれもちぎれた状態を呈し、もとの用途も全貌もわからない。組織・用彩は、淡白茶の経と深縹の緯による右下りの経三枚綾地緯六枚同方綾文の織色綾の随所に、淡黄色の絵緯による地裾のやはり右下り六枚綾の別文を織り入れたものである。絵緯の織り込みかたは、資料が小片ばかりなので断定はしたが、必要部分にだけ縫取織式に折返しているようで(挿図1)、糸の端は裂裏で切放されている(挿図2)。すなわち、花樹双鳥文綾(書陵部紀要二八号所収筆者論文のもの)とNo.109花樹鳥獸文錦を合成したような織物である。図版中の左下の一片(カラー図版6)にみえる親子の鹿はNo.109の虎の親子をほうふつとさせる。また右上の一片(カラー図版5)にあらわれている蔓状の懸垂花葉は、右記の花樹双鳥文綾やNo.94・95・96などの一群の樹下動物文系綾

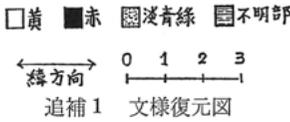
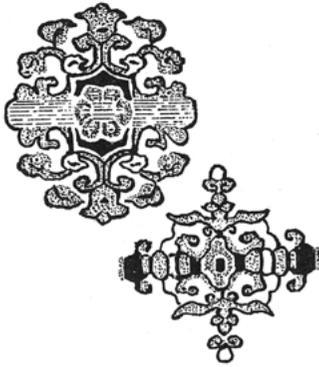
地同方綾文綾に通じて類似のものがみうけられる。以上のような組織・文様の共通性よりみて、本件は八世紀後半に入った一時期にわが国で生産されたと思われる経三枚綾地系特殊樹下動物文錦綾グループの構成分子の一つと考えるべきであろう(書掲部紀要二八号前掲論文参照)。経糸中の一部にごくゆるいZ撚のものが認められる以外、経・緯ともほとんど撚りはない。糸込みは一趣間に、深縹緯約四〇越、経約五四本。

花文系追補

追補1 黄地花文錦 (モノクロ図版9・10)

〔資料〕 用途不明裂小残片七八片。

〔所見〕 資料は概して巾数種ないし二、三種、丈一種ないし三種の小残片で、それらをつぎあわせて挿図のとおり復元したが、なお主文の中央を左右に走る部分は不明である。主、副文ともに寸法はほぼ同じで、



径約五・三種と比較的小さい。新5紫地花文錦(前篇に採録)と同様に、単純な小花文から唐花文へと進む過程上のわりあい早い時期の様式と考えられる。複様三

枚綾組織の緯錦で、黄・淡青緑・赤の三重緯。経はすべて黄。糸込みは一趣間に、表に出る緯約二八越、母経約一六本。

追補2 紫地花文錦 (カラー図版No.12)

〔資料〕 用途不明裂残片二片。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。資料の二片はともに中央部で綾流れの方向が杉織状に変わる。図版にみるとおり、アズキ色風の紫、濃青緑、わずかに黄味を帯びた白の三重緯で、経はすべて白。文様は、径約七種のかなり便化された六弁花文の横列のあいだに小花文を配したものである。図版下段の裂にその小花文があらわれているが、損傷のため見難い。

No. 53 花文錦



あるのかどうかも不明だが、図版下段の裂によると六弁花文の上下はかなり空地がひろい。すでに知られている錦文としてはNo.53白茶地花文錦(挿図)がいちばん近い。No.53は経錦だが、天平勝宝九歳の聖武天皇一周忌齋会尿道場幡に使用されており、本件もひろい空地、便化した文様などからして、おそらく右と同じころの製作になるものと考えられる。糸込みは一趣間に、表に出る緯約二八越、母経約二〇本。

総合所見

前篇の冒頭に述べた書院部紀要一三号所収「正倉院の錦」（以下「紀要報告」と略称する）は、正倉院に現存する錦の報告という立場をとっているため、明らかに法隆寺系の混入品とみられるもの（たとえば三種蜀江錦など）も収めている。したがってその点や純粋さを欠くが、反面本来の正倉院伝存品に限定されない上代錦の広くかつ最も完備した報告として貴重である。いまこの報告から、問道や綴織など厳密な意味での錦に入れ難いものを除き、その残りを組織・文様別に整理分類し、さらにそれらに、紀要報告以後のわたしの調査に基いて、法隆寺系と、正倉院製の二大グループである天平勝宝四年の東大寺大仏開眼会用品および同九歳の聖武天皇一周忌斎会用品（以下それぞれ、開眼会用品、一周忌用品と略称する）と、系統を注記してみたのが下段の第一表である。^(註1)

さてこの表からわたしが導き出した上代錦の変遷史は、すでに二、三の拙著などでしばしば述べているので、いま詳述はしないが、きわめて要約的にいえばおおよそつぎのとおりとなる。

まず技法上古式な経錦は、文様面からも初期的な直線構成、または漢・六朝風の蒼古晦渋なもの、さらには花文・連珠円文中の比較的未発達のものなどに集中する傾向が強いが、文様の種類数、遺存量の両面からみて、奈良中期にはすでに衰退していたと思われる。また西方系の文様は、古い経錦と新しい緯錦の両方に跨っているが、その多くはすでに

組織 文様	経 錦		綾組織緯錦	その 他
	平 組 織	綾 組 織		
幾何学文系 18種	3種（うち2種法、1種法か）	9種（うち1種開、3種法か）	5種（うち1種周）	平地緯浮文2種（各法）
連珠円文系 14種	4種（うち1種法、2種法か）	6種（うち1種周）	4種（うち1種開・周共用、1種周）	平組織緯錦1種（法か）
単一花文系 10種		5種（うち1種周）	5種（うち2種周）	
長斑風配列花文系 5種		5種（うち3種周）		
主・副対応花文系 6種		3種（うち1種開、1種周）	3種（うち1種周）	
唐花文系 25種		1種	24種（うち1種開、10種周、7種開・周共用）	
間地添文式花文系 10種		1種（周）	8種（うち5種周、1種開・周共用）	経綾地緯浮文1種（周）
地文上花文系 4種			1種（周）	経綾地緯浮文3種
動物唐花・唐草文系 6種			6種（うち2種周、2種開・周共用）	
絵画風文系 2種			2種（うち1種周）	
樹下動物文系 4種			3種（うち2種周）	経綾地緯固文1種（周）
唐草文系 3種		1種（開）	2種（うち1種開）	
長斑・暈網系 26種		9種（うち4種周）	12種（うち4種周）	経綾地経固文1種、経綾地経浮・固文4種

●幾何学文系、連珠円文系中には、一文様が経錦・緯錦両方にわたるもの各1種あり
●法は法隆寺系、開は東大寺大仏開眼会用品、周は聖武天皇一周忌斎会用品を示す（第二表も同じ）

発展が止まるか、あるいは本来の意味を見失なって和風化の道を歩みはじめていた。一方花文は緯錦技術の習熟によって発達し、奈良中期の錦はその殆ど半ばを多彩豊かな唐花文緯錦によって占められることとなったが、反面早くも同じころから、右の姿勢と雁行するように唐花文それ自体の簡略化、また動物唐花文・加飾唐花文^(註2)の出現にみられるような多様化の傾向があらわれる。そしてこの傾向は、前述の西方系文様の和風化とあい俟って、平安朝織物文様の萌芽を思わせる簡素にして優美な姿へと移行していく――。

以上が上代錦の変遷の要約だが、さて今回発見の四二種は、右にみた流れのなかでどのような地歩を占めているのだろうか。

まずこの四二種をさぎの第一表にならって分類すれば、下段の第二表のとおりとなる。

この四二種の箇々の意義についてはすでに各説中で随時触れておいたから、ここでは最後のまとめとして、この第二表を背景におきながら、便宜上おもに組織べつに総合所見を述べることにしよう。

まず技法上最も古式な平組織経錦は四種が発見された。うち三種(新30・31・32)は文様上でも初期的な幾何学系文様、また一種(新25)が古風な漢・六朝式文様であることは、前述の要約と軌を一にしている。しかしこの四種中の二種(新25・31)が開眼会用品であることは、きわめて重要な事実といわねばならない。紀要報告には七種の平組織経錦が挙げられているが、うち三種(No.13・22・29)は法隆寺系蜀江錦であり、また

三種(No.19・30・31)も法隆寺系の可能性が強く、残り一種(No.37)は法隆寺・正倉院のどちらとも判定する決定的根拠がなく、むろん使用時もち

組織 文様	経 錦		綾組織緯錦	その他
	平 組 織	綾 組 織		
幾何学文系 4種	新30~32 (うち31は開, 32は法)		新33	
花 文 系	単一花文系 5種	新 1.2.7 (うち7は開)	新4.6 (うち6は周)	
	長斑風配列 花文系 2種	新 3	新22	
	主・副対応花 ・唐花文系 16種		新5,8~21, 追補 1 (うち13は開, 9,12, 16,19は周)	
	間地添文式花 文系 2種		追補 2	経綾地緯 浮文新38
	地文上花文系 1種			緯固地緯 浮文新39
動物唐花文系 2種			新23,24 (うち24は周)	
絵画風文系 3種			新34,35 (うち34は周)	経綾地緯 固文新40
唐草文系 5種	新25(開)	新28	新26,27,29	
縞及び長斑系 2種		新36(周)		間道風 新37

から^(註3)。尤も平組織経錦それ自体は、註3にも記したように開眼会用品の上に使われてはいるが、それらはおおむね楽舞装束に微細な残片として付着しているにすぎず、文様などは全く不明であった。したがって従来まことに乏しく不確実な資料によってするのほかなかった平組織経錦の下限の推測に、今回完全な文様の新資料が加えられたわけである。ちなみに一周忌以後の銘をもつ宝物類でこの組織の錦を使用しているのは、いまのところ全く見当たらないから、平組織経錦は開眼会から一周忌以前の間に名実ともに姿を没してしまったものと思われる。

つぎに新しい綾組織緯錦はさすがに多く、今回発見の半ばを越す二八種がこの組織で占められている。とくにその大半が唐花文またはその変形や簡略化の過程に位置する作品であることは、やはり前述の要約の線に沿うものである。なかでも開眼会用品の新13に早くもあらわれている唐花文の略式化傾向、また一周忌用品の新しいコンパクトな紋章風文様への転換は、唐花文の解体がすでに奈良中期から始まっていたとの従来の推測を、さらに強く支える新資料といえよう。また同じく綾組織緯錦中の新35は、紀要報告No.41・42とはまた違った狩獵文として、西方系文様へのわが国流の解釈の一端を示唆する興味ふかい作品である。

最後に特殊組織は四種だが、古風な新37を除く三種は平安朝以後の和風織物の萌芽ともいべき作品で、それぞれに独自の意義をもっている。すなわち新38は従来No.95・107・109など少数の資料によって僅かに窺い得る状態であった後世の浮織物や糸錦との関連を補強するものであり、ま

た新39の帛面感が有職裂の二倍織物を直ちに連想させることはいうまでもない。さらに新40は獅子使い文綾(書陵部紀要一二号「正倉院の綾」のNo.94)および花樹双鳥文綾(同一二八号拙論のもの)と地組織が全く同じで、やはり平安朝以後に発達する織色綾・綾地同方綾文綾の源流を知ろうえでの貴重な資料である。とくに本件新40は右二件の綾に絵緯を加えたいわゆる錦である点、いっそう複雑であり、これが国産か舶載品かはしばらく措くとしても、新しいタイプの織物として世上の関心を集めたことであろう。

以上、今回発見の四二種は、大綱において前述の要約に沿うものであるが、とくに奈良時代のなかでも従来資料が比較的少なかった前期と後期の様相を、よりいっそう鮮明に浮き上がらせる作品を含んでいる点にはなほだ意義深いものがあるといえよう。

註

- (1) ただし文様の分類は、わたしの独自の見解を加えており、紀要報告のそれとは異なるところがある。
- (2) 加飾唐花文とは、主・副文対応形式の唐花文の空地に種々な付加文を散らせた形式をいう。わたしの創造語で、拙著「正倉院ざれ」(昭和五七年、学生社刊)にはじめて用いた。
- (3) No.37赤紫地鳥獸連珠文錦は紀要報告各説の当該項の説明によれば、開眼会用品羅染婆理の脛裳に同文長斑風のものが使われているという。しかし開眼会用品婆理の在銘脛裳は現在玻璃装古裂一一一號と同二七〇號との二点があるが、わたしの実検では、前者は緑地小花文風(詳細不明)の綾組織経錦、また後者はたしかに平組織経錦だが地地の表に殆ど痕跡をとどめるのみで、僅かに緑・金茶・紫の三重経を認めるにすぎず、文様も全く不明で、とうていNo.

37の同文錦とはみえない。また一方No.37の同文長斑風の錦は古屏風、四九号第三層に大片が貼られているが、こちらの方は墨書がない。したがって紀要報告中の右の説明は、なんらかの錯誤によるものと思う。

資料所在表

(函は函装古裂、玻は玻璃装古裂、帖は帖装古裂を示す)

新二	黄地小花葉文錦	玻二二四号、帖八〇七号
新三	白地小花文錦	南倉一二七号櫃雜四〇号
新四	黄地小花文錦	南倉一二九号櫃雜四号
新五	段地花文錦	玻二二五号、帖八号、同六四九号
新六	紫地花文錦	函七一、帖六五〇号
新七	白地丸形花文錦	南倉一二六号櫃一五号、同一二二号、同二九号櫃一三四号、玻五四号
新八	浅緑地花文錦	南倉一二四番呉楽用物七〇号、同一四二番機四号、二五〇三九号、四一〇四九号
新九	浅紅地花文錦	南倉一二七号櫃雜二〇号、同一三〇号櫃雜七号、帖一〇九号
新〇	赤地花文錦	南倉一二八号櫃一二号、同一二九号櫃九九号、同一三四号、同一三〇号櫃一四号、同一三七号櫃一四号、函一四号
新〇	赤地花文錦	玻四一五号
新一一	縹地唐花文錦	南倉一二八号櫃五一号、二四八号、二四九号
新一二	赤地唐花文錦	南倉一二九号櫃一三四号、一三〇号櫃一九号、四七号
新一三	黄地唐花文錦	南倉一四七番帯緒類五号、同一二八号櫃雜二六号
新一四	紫地唐花文錦	南倉一三七号櫃五号、玻四二二二号、帖六五〇号
新一五	黄椽地唐花文錦	南倉一三七号櫃一三三号、玻二二〇号、南倉一二九号櫃一三四号、同一三〇号櫃三二二号
新一六	赤地唐花文錦	南倉一二九号櫃一三四号、同一三〇号櫃一五号
新一七	紫地唐花文錦	南倉一二九号櫃雜七号、同一三七号櫃一五号

新二一	赤地大花文錦	玻四一四号
新二二	赤地花山岳文錦	南倉一三六番袴一号
新二三	白地鸞鷲唐花文錦	南倉一二九号櫃雜九号
新二四	赤地麒麟唐花文錦	南倉一二七号櫃一八三号、同一二八号櫃一四一、同一二九号櫃一四一
新二五	紫地唐草鳥獸文錦	南倉一四〇番帶一号、同一四二番機五号、七号、函四二号
新二六	赤・白交地唐草禪花文錦	南倉一二七号櫃雜一二号、帖一〇六号、一〇九号、七七七号
新二七	白茶地唐草禪花文錦	南倉一二九号櫃雜九号
新二八	白地集花葉文錦	南倉一五〇番袴一二号
新二九	黄地唐草花文錦	帖七号、九号
新三〇	緑地禪小花文錦	南倉一四二番機五号
新三一	紫地亀甲花文錦	南倉一三四番半臂五号、同一四二番機五号、四〇号、五〇号、五一号、函六四号
新三二	赤紫地亀甲花鳥文錦	中倉七二号櫃
新三三	段地襷菱文錦	玻二二四号
新三四	浅緑地鹿雲文錦	南倉一二六号櫃一五号、同一二七号櫃一二二号、一六一号、二一四号、二一六号、同一二八号櫃一九六号、二一七号、同一二九号櫃八六号、一三四号
新三五	赤地花唐草狩獵文錦	南倉一二六号櫃雜二二号、帖六号
新三六	双鳥花文長斑錦	南倉一五〇番袴一二号、同一二八号櫃二〇七号
新三七	淡黄地経綵文平織物	南倉一二六号櫃一四六号
新三八	紫地唐花文錦	南倉一二七号櫃雜二〇号、同一三〇号櫃雜七号
新三九	赤地唐花文錦	南倉一二九号櫃一三四号
新四〇	赤地唐花文錦	南倉一二八号櫃一二九号、一三〇号、雜三二二号、雜三三三号、帖八五号

新三八	淡茶地花文錦	南倉一二九号櫃一一四号
新三九	緑地花文錦	南倉一二九号櫃一一五号
新四〇	白茶地花葉鹿文錦	玻二二六号
追補一	黄地花文錦	帖四号、一二号、四九一号、六三八号
追補二	紫地花文錦	玻二七五号